



大阪部会(第74)回・東京部会(第123回)合同部会報告

日時:	2021年4月24日(土) 15:00 - 17:00
場所:	web上の会議
参加者:	28名

【内容要旨】

1 「夏休み先生のための経済教室」に関して、鈴木深氏、坂倉 有香氏(東京証券取引所)か、「ちらし」をもとに以下のようなプログラムで実施するとの報告があった。

- ・形式はライブ配信での実施。6月から東証HPで募集をおこなう。
- ・日程は、8月13日(金)中学教員向けプログラム、16日(月)高校教員向けプログラム。
- ・講演講師は、13日が野間敏克先生と河原和之先生、16日が大竹文雄先生と坂井豊貴先生。
- ・東証内のスタジオから生でYouTube配信する。スタジオ内に少人数なら参加可能なので、後日募集をする。
- ・時間が限られているので、質問など事前に募集してコメントータに適宜質問してもらうような方式も考える、などである。

2 奥田展大先生(奈良学園中学校・高等学校)から「公民科×数学科の教科間連携のとりくみ」の報告があった。これは奈良学園高等学校での文化系探究授業「課題研究」の2018年度からの取組みの紹介したものである。奈良学園は、SSH指定校であり、SSH第一期は理系の取組みのみであったが、第二期に文系科目でも探究活動を行うことになったことがまず紹介された。

2018年度には、プレ授業を行なった。高校2年生の課題研究(週2時間)の「奈良市の観光」をテーマとしたRESASによるデータ分析を通しての課題発見、課題解決の学習に取組ませた。この時は、公民科単独の取組みであった。

2019年度には、同じ課題研究のなかで、数学科と連携して、数学で学習してきたデータ分析を活用してエクセルでグラフを書き、関数を使用し、公的データから相関関係を発見させるなどの準備をして、「ビジネスグランプリ」に応募させた。入賞とはならなかったが、高い評価をうけた「シカをモチーフにしたレンタカーサービスC-CAR」の内容が紹介された。

この年の反省点としては、RESASを使っても中途半端な分析に終わり、深みのない内容になったとの総括が紹介された。

2020年度は、反省を踏まえて、目標をRESASの「地方創生アイデアコンテスト」の応募においた。そのために、まず奈良に関するイメージマップ作りをさせ、そこから奈良の良いところ、悪いところ、よくするための方法を提案させる手順を踏んだ。また、奈良だけでなく、自分たちが住んでいる地域に関しても対象をひろげさせた。

生徒の作品では、観光、地域活性化、防災などがでてきた。特に、防災ではデータを十分に生かした分析、提案がでてきた。

20年度も反省としては、コロナの影響も加わり深みのある研究が生まれなかった点があり、対象を絞る、教員を助ける人間、助言者などが必要になると総括された。

2021年度(本年度)は、週1時間通年として、「豊かでおもしろい奈良をつくろう」をテーマに取組みを始めている。18年度に取組んだ生徒が大学生になり、TAとして入ってくれることにもなり、新たな展開を目指して



いる。との報告があった。

(1)授業の報告の後、奥田先生より、RESASの紹介と、同じ奈良学園の山本先生の補足があった。

・篠原代表から以下のようなコメントがあった。

奥田実践は、奈良学園の中学校で継続しておこなわれている卒業論文作成の伝統が生きている。

(2) REASAS の使いかた。地域の経済情報をカバーした、使いやすいデータベースであり、中高生は、指標ごとのグラフを読み取ることができる。また、グラフの裏にある元データをエクセルなどでダウンロードできるので、変数と変数の関係を調べることもできる。奥田実践のように統計処理をする段階までいかなくとも、高校生なら2変数を軸にしたグラフにしてみるなど、新しい教育に活用できそう。ただし、データは市町村レベルまで細分化されているので、教科書にでてくるような経済問題を分析するには適していない。むしろ、今回の奥田実践で取り上げたような地域と直結する課題の分析に活用できるのではないだろうか。

・以上の報告とコメントを踏まえて、以下のような質疑及びコメントがよせられた。

Q(中沖):RESASは使えると思うが、ターゲットを絞った使い方が必要では。また、データが最新になっていない可能性もあるので注意した方がよい。

今回の報告の授業計画やそれぞれの時間での生徒への働きかけや指導の様子、生徒の取組み具合が聞きたい。

→多くの生徒は授業内の作業として取組んでいるが、もっと深く研究をしたいとして放課後やアドバイザーとコンタクトをとっている生徒もいる。探究はグループで取組ませて、教員二人(私と数学の教員)が指導しているが、なかなか手が回らない。また、公共提案をする場合は社会科の担当となるが、これも数が多くなると見きれない。今年からOBがTAとして入るので改善されるだろう。

Q(新井):「深みが足りない」とあったが、「深み」とは何を意味しているか?

→外部のコンテストに入賞できるレベルまで到達できたことを深みの規準と考えている。

Q(豊岡):公民×数学との連携とあったが、探究学習と教科の関連をどうしているのか?

→数学は先取り学習をおこなっていて高2段階で数ⅡBまでやっているの、習ったことを使うという状況である。公民科では、教科書の探究学習の箇所を使ったり、経済分野から授業をすすめたりするなどの配慮することで、内容的には一応扱っている。

Q(丹松):奈良市は世界遺産登録の時期に多くの学校で取組まれた研究実績があるはずでそれをリサーチするとよいのでは?また、学校全体での取組みにはできないか?

→リサーチはしたが、まだ十分ではないので指摘されたものなど調査したい。学校全体では、理科から始まり、数学、社会とひろがっている。中三の卒業論文とのリンクなども視野に入れたい。

3 新井(目白大学非常勤講師)から「共通テスト「公共」サンプル問題から考えたこと」の報告と埴枝里子先生(東京都立農業高等学校)からのコメントがあった。

・新井の報告は以下の通りである。

サンプル問題が公表されて、新聞等では「長い文&多くの資料で大変」「試される考える力」などのコメントが



あったが、今年からはじまった共通テストの出題傾向を強化したものになっているのではないかと。

テスト問題は大問3題で、それぞれ「公共」の内容A、B、Cに即した問題となっている。

第一問は、Aの公共の扉に対応する問題で、食品ロスをテーマとした課題探究の結果を発表する場面設定での三つの小問。

第二問は、Bの自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たちに対応する問題で、政治参加をテーマとして合意形成、予算作成とそれをもとにした模擬国会を場面設定とする四つの小問。

第三問は、Cの持続可能な社会づくりの主体となる私たちに対応した問題で、SDGsに関するグループ学習の発表形式による設定。小問は4つだが、問1でデータ4つ、問2でデータ2つ、問3でデータ5つを読み解く問題となっている。

これらに対して、新井は、全体としてまだ荒けずり、授業改善の圧力を一層感じる、意欲的だがあまりにも意欲的過ぎて対応が難しい、今回は問われていないが数理的な処理も求められるだろう、結果として学力差がもっと広がるだろうという5つの感想を持ったことが紹介された。

対応としては、読解力をつける指導をこころがけること、資料やデータを使う授業にすべき、単なる活動にくわえてその活動を振り返ったり評価したりする学習を組織する必要があること、場面設定やテーマが難しい社会的問題を取り上げているので教室でもそれに呼応するような鋭い問題意識でテーマ設定をする必要があるのではという提言が出された。

- ・指定討論者の埴枝里子先生からは以下のようなコメントが寄せられた。

意欲的な問題であり評価したい。ただ、毎回これと同じレベルの問題を出すのは難しいのではないかと。

着目したのは大問2の問3の問題の思考実験の問題とその解答方法で、共通テストのプレ問題にも2パターンの問題があった。また、多数決に関する問題も本年の共通テスト「現代社会」にもあり、合意形成のための思考実験や正答を一つ選ぶのではなく自分の選んだものがその後の選択と関連するような問題が定番になればよいのではと思う。

探究形式の授業をおこなえというメッセージに関しては、教員がそれぞれの教科で探究活動をやろうとして生徒は探究疲れになっているとも指摘されている。また一つ一つは浅くなってしまっているきらいもあるので、学校全体で取組むことができるようになる試みを始めている。

- ・二人の報告をうけて以下のような質疑、コメントが寄せられた。
- ・(鍋島): 新井報告に関連するブログの文章を紹介してあるので参照してほしい。この文章での他教科のものを見ておくといいのは「情報」なども含めてのもので、「情報」の問題は公民科で扱ってもおかしくない内容で、いろいろな観点からみることが求められるという趣旨である。

また、探究活動は各教科で全部やろうとしてもダメで、総合探究をコアにして、各教科の内容を組み合わせでゆくことが大事だろう。

前半の質疑であった「深まり」というのは、どれだけそのテーマに関して問を重ねたかによるのであり、例えばある答案を書いて終わりではなく、もう一度その解答をみんなで検討して見直しをさせて、また考えるというプロセスがあるかどうかポイントとなろう。

- ・(大倉): 今回の「公共」の問題は、以前の共通テストのプレテスト問題がベースとなっていて、その意味では今回の指導要領やプレテストの精神が生きていると思う。



文章が長いという指摘があったが、入試問題はどこからも文句がないようにするためにどうしても長くなりがちで、その点からも長くなってしまふのは避けられない。

出題者の意図や、それをうけての教員の指導や思いがあっても、生徒からすれば正答が出れば良いというギャップがどうしてもでてくるので、大問の間3のような問題は生徒にとっては簡単な問題になってしまうかもしれない。

- ・(込山):2点質問したい。一つは、探究活動でだれ一人取り残さないためにどんな工夫をすればよいのか？もう一つは、探究のためのデジタルbookが配布されたが、どんな活用方法があるのか実績があるケースがあったら教えて欲しい。

→生徒を全員探究に向かわせるのは正直難しい。グループ学習を中心に、状況に応じて個別指導を加えるくらいしか思いつかない。後者の活用に関しては、出校している学校ではロイロノートの思考ツールを使っている先生がいて成果をあげていた。

- ・(小谷):中国から帰国したが、日本の学校のデジタル化の遅れを実感している。中国ではロイロノートを使っていた。使いこなすまでは大変な面はあるが、生徒の理解は教員より早いので環境を整えればどんどん使うと良い。また、この種のデジタルツールや探究活動に関しては、日本では抵抗感を持つ先生も多いので、まずは自分からはじめて広げてゆくしかないと思っている。

- ・(中沖):グループ学習では、中学校で、生活班とは別の社会科班を作って理解度の違う生徒を組み合わせ、そこを通して生徒全員に目をくばった探究活動をおこなわせ成果を上げている先生がいたので、参考にしたらどうか。

以上、2つの報告と質疑、討論で今回の合同部会は終了した。(記録と文責、新井)

<input type="checkbox"/> テスト問題 (新テストなど)	<input type="checkbox"/> 中学	<input type="checkbox"/> 高校	<input type="checkbox"/> 指導案	<input type="checkbox"/> 新聞教材(NI E)
--------------------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	------------------------------	----------------------------------------

次回開催予定: 7月3日(土) 15時00分~17時00分

東京・大阪合同でweb開催

議題 教材の提案とその検討